

榎本博明著「あらゆる調査で『力』を実証『経済力の学力格差』を乗り越える方策は『読書』」週刊新潮 2022年1月20日刊を読む

<はじめに>

- (1) 全国学力調査で判明「読解力」は「家庭の蔵書量」に比例
- (2) 高学年では手遅れ！限られた資金を幼少からの「絵本」「児童書」に
- (3) 裕福「学習塾」漬けでも親が読書嫌いなら子の成績は下位
- (4) 「経済格差」「遺伝」より「本のある環境」が勝る
- (5) 子どもの頃から絵本や本に親しむことが大切
- (6) 読解力がないと教科書や先生の話が理解できない

I 読み聞かせの効果

1. (1) こうしてみると学力格差の大きな要因として読解力の問題があるといっただろう。
(2) であるなら、読解力を高めることができれば学力格差の問題を乗り越えられる可能性が見えてくる。そのカギを握るのが読書だ
2. (1) 読書によって知的発達が促進されるというのはしばしば指摘されることであり、実際、読書によって語彙力が高まることは、心理学や教育学の多くの研究により示されている。
(2) 読書量と語彙力の関係については多くの調査研究が行われているが、幼児期から児童期の子どもを対象とした研究をみても、中学生や高校生を対象とした研究をみても、大学生や大学院生を対象とした研究をみても、どの年代でも一貫して読書量の多い者ほど語彙力が高いといった傾向が示されている。
3. (1) 2歳前後の幼児の場合は、自分で読書することはできない。
(2) その場合は、本をよく読むかどうかというより、読み聞かせをよくしてもらっているかどうか問題となる。
(3) 読み聞かせの効果に関しても、多くの研究が行われている。
(4) そうした研究により、読み聞かせを始めた時期が早いほど、また読み聞かせの頻度が高いほど、語彙力が高いことが明らかになっている。
4. このように、独力による読書であっても、読み聞かせによる間接的な読書であっても、読書経験が語彙力を高めることは科学的に実証されている。
5. (1) 本を読むということは、多くの言葉に触れることでもある。
(2) ゆえに、読書によって多くの言葉に触れている子と、読書をあまりせず言葉に触れる機会の少ない子では、獲得している言葉の数が違って当然と言える。言葉をたくさん知っていれば本を何の苦もなく読むことができるが、言葉をあまり知らなければ本を読むのに苦勞する。
(3) そこに読書と語彙力の相互作用が生じる。
6. 文章を理解するには、語彙力とともに読解力も求められる。言葉をたくさん知っている方が文章を理解しやすいが、文脈を読み取る力もないと文章の意味を十分理解することができない。

7. (1)この読解力についても、読書量が多いほど読解力が高いことが多くの調査研究によって示されている。
(2)小学生の読解力に関しても、読書量がそれを規定していることがわかっている。
(3)自分では本を読めない幼児期における親による読み聞かせも、小学校に入ってから読解力を高めることもわかっている。
(4)そして、小中学校時代の読書量が大学生になってからの読解力に影響していることも示されている。
8. (1)さらには、小学生を対象とした調査研究などで、語彙力が読解力につながり、読解力が語彙力を高めることが示されている。
(2)語彙が豊かであれば文章を理解しやすく、文章を理解する力があれば、わからない単語の意味も文脈から推測することで新たな語彙を獲得していくというように、語彙力と読解力の間には相互促進的な作用が働いているということだろう。
9. こうしてみると、幼い頃から読書習慣を身につけることが、格差社会を乗り越えるための手段として有効と言えそうだ。

II 環境で伸びる言語能力

1. (1)以上のように読書によって語彙力や読解力が高まることが実証されているが、幼い頃の語彙力や読解力の差は、その後もなかなか解消されないようだ。
(2)たとえば、小学校1年生の時点における語彙力の差は6年生になってもほぼそのまま残ることを示すデータもある。
(3)さらには、幼稚園入園時の語彙力が下位4分の1に入る子は、小学校6年時までには同学年の平均的な子より語彙力も読解力も3学年分遅れることを示すデータもある。
2. (1)そこには読書と語彙力・読解力の相互作用が働いているとみることができる。
(2)つまり、よく本を読む子は、語彙力や読解力が高まるため本を読むことが苦にならず、読書を楽しむことができる。
(3)それによって、ますます語彙力や読解力が高まり、読書好きになっていく。
(4)一方、あまり読書をしない子は、語彙力や読解力が乏しいため本を読むことが苦になり、あまり読書を楽しめない。
(5)その結果、なかなか語彙力も読解力も高まらず、読書嫌いになっていく。
3. (1)そのことが学力格差につながっていく。すなわち、読書によって語彙力や読解力が高まっていけば、各教科の教科書や先生の解説の内容を理解できるため、教科内容がよくわかり、勉強が楽しくなるし、成績が向上する。
(2)一方、語彙力や読解力が乏しいと、各教科の教科書や先生の解説の内容がなかなか理解できないため、教科内容がよくわからず、勉強が苦痛になり、成績は向上しにくい。
4. こうして、読書を楽しみ語彙力・読解力を高めるとともにさまざまな知識・教養を身につけていく子と、あまり読書をせず語彙力・読解力が乏しく知識・教養が身につけにくい子に分かれていく。

5. (1)このようにみてくると、子どもの頃から絵本や本に親しむことが学力につながっていくの
がわかるだろう。
(2)そこを工夫すれば経済格差を学力格差につなげないようにすることができるわけだ。
(3)読書の力を利用して、子どもの教育環境を整えていくのである。
6. (1)言語能力が高い子の場合、親の言語能力も高い事例が多いことから、言語能力は遺伝によ
って決まるのではないかと思われがちだが、行動遺伝学的研究により言語能力には家庭環境
の影響が大きいことがわかっている。
(2)子どもが親に似ているのは、遺伝によるだけではない。
(3)子どもにとって親というのは、遺伝要因であると同時に最大の環境要因でもあるのだ。
7. (1)親の社会経済的地位や学歴は、家の蔵書数にも影響するだろうし、図書館や博物館・美術
館などの文化施設に連れて行く頻度にも影響するだろうし、親自身の読書や勉強に取り組む
姿勢にも影響するだろう。
(2)親が日常のやりとりで用いる語彙の豊かさや乏しさも、世代間伝達を担う環境要因の一種
と言える。
(3)このような要因が経済格差と子どもの学力格差の関連の背景に潜んでいるわけだ。
8. 世代間伝達というと、遺伝の力を思い浮かべて、どうにもできないことのように思いがちだが、
このような世代間伝達における環境要因に目を向ければ、やりようによっては子どもの言語能力
の向上をいくらでも促すことができるとわかり、工夫や努力の方向性も見えてくるはずだ。
9. (1)環境面での世代間伝達について考えていくと、たとえば読書好きな親の姿勢や蔵書の多さ
が子どもの読書好きを生んだり、反対に読書に興味のない親の姿勢や蔵書の乏しさが子ども
の読書嫌いを生んだり、知的好奇心の強い親の姿勢や行動パターンが子どもの知的好奇心の
強さをもたらしたり、反対に知的好奇心の乏しい親の姿勢や行動パターンが子どもの知的好
奇心の乏しさを生んだりする。
(2)そうした世代間伝達を念頭に置いて、子どもの言語能力の発達を促進する方向に環境を整
えていくことが大切である。

Ⅲ 親自身が書物に親しむ

1. (1)2017 年度に文部科学省によって実施された全国学力・学習状況調査の結果と、その対象
となった小学 6 年生および中学 3 年生の子どもたちの保護者に対する調査の結果を関連づ
ける調査報告書がある。
(2)それをもとに、家庭環境と子どもの学力の関係について検討することで、蔵書数の多い家
庭の子どもほど学力が高いことがわかっている。
2. (1)だが、蔵書数は親の社会経済的背景と関係しているのではないかというのは、だれもが思
うことのはずだ。
(2)データを確認すると、やはり社会経済的地位の高い親の家庭ほど、つまり学歴や収入が高
い親の家庭ほど蔵書数が多くなっている。
(3)ところが、社会経済的背景要因を抜きにしても、家庭の蔵書数と子どもの学力は関係して
いたのである。

3. (1)つまり、学歴や収入の低い層でも、高い層でも、それぞれの層の中では、蔵書数が多い家庭の子どもほど学力が高いという傾向がみられたのだ。
(2)たとえ裕福でなくとも、どんなに貧しくても頑張って親が本を買ったり図書館で借りたりして読んでいる家庭ほど、それに応じて子どもの学力が上がっているわけである。
4. (1)たとえば小学6年生では、蔵書数が0～10冊の家庭の子どもよりも11～25冊の家庭の子どもの方が学力が高い。
(2)それよりも25～100冊の家庭の子どもの方が学力が高い。
(3)101～200冊の家庭の子どもはさらに高い。
(4)そして、201～500冊の家庭の子どもはそれ以上に学力が高く、501冊以上の家庭の子どもが最も高くなっていた。
(5)蔵書数というのは親の読書に対する姿勢のあらわれと言えるが、蔵書数ひとつみても、家庭の文化的環境が学力に与える影響がいかにかわかっていくかわかるはずだ。
5. (1)もし親自身に読書習慣が欠けている場合には、自らが書物に親しむように努力することも必要だろう。
(2)子どもは知らず知らずのうちに親を真似るものであり、そうしたモデリング効果の存在は心理学でも実証済みである。
(3)ゆえに、子どもに要求するよりも、親自身が身をもって示すほうが効果的であり、それこそが世代間伝達の重要な一側面とも言える。
(4)子どもに絵本を与える場合も、絵本を身のまわりに置いておくのはもちろんのこと、ときには一緒に絵本を見たり、読んであげたり、描かれている人物や動物を指差しながら会話を楽しんだりするのも、絵本への関心を高めるのに効果的だろう。
6. (1)親自身がこのようなことを踏まえておけば、たとえ社会経済的地位や学歴にハンディがあっても、世代間伝達の環境要因を用いて子どもの学力向上を支援することができる。
(2)格差社会を乗り越えるためにいかに読書が効力をもつかをわかってもらえただろうか。
7. (1)もちろん子ども自身のもって生まれた個性もあるから、いくら環境づくりに腐心したところで、空振りに終わることもある。
(2)たとえ無駄に終わるかもしれないにしても、子どもをもったからには、その子の将来の可能性を広げるためにできるだけのことをするのは親としての義務であろう。
(3)しかも、読書が効果を発揮する可能性が大きいことは明らかなのだから。

P40～43

<コメント>

開倫塾では、

(1)「辞書・新聞・読書の活用」で読解力の育成をおすすめしています。

(2)「読書」による「読解力」の育成の大切さ(価値)が、わかりやすくていねいに説明してある、この榎本博明先生(心理学者)による週刊新潮の特集は極めて高く評価させて頂きたい。

是非、塾生・保護者・地域社会の皆様にもご紹介し、ともに学んで頂きたい有難い特集と感謝します。

2022年1月13日 林明夫記